世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

Documentary is a cause about creature

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-08-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大澤, 一生 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/614

ドキュメンタリーは、生きものの仕事

大澤　一生

たかが10年、されど10年

ドキュメンタリー映画を作りはじめて、10年が経ってしまいました。製作はもちろんですが、映画館で上映していく配給もしており、今も何本かの作品を並行して動かしています。映画を始める前は薬剤師として働いていました。薬科大学を出てドラッグストアに就職し、順風満帆で安定生活を送っていた中、ふいと浮かんできた「学生の頃から好きだった映画を作ってみたい」という漠然とした願望。若気の至りかその欲求に抗えず、つい勢いで仕事を辞めて映画の専門学校に入学してしまい現在に至ります。

あのままドラッグストアに勤めていれば、車を買って家を買って、それなりのお給金を頂きながら安心して老後に備えていたでしょう。そんな後悔をしながらも結局続けてしまっているドキュメンタリー映画の魅力とは一体何なのでしょうか。この10年でわかったこともありますが、わかっていないこともたくさんあるのです。

出会うこと／生まれること

ドキュメンタリーといえば、政治や社会問題等を扱う社会派のイメージがあるかもしれませんが、アートやファッション、建築といったカルチャー的な題材や、個人の視点で自身や家族を捉える作品もあり多種多様です。強いて定義づけるなら「何らかの現実をモチーフにした映像作品」ということになるでしょうか。

入学した映画の専門学校では、監督だけでなく撮影、録音、編集、脚本等、映画に関する様々なポジションの専門コースが分かれていましたが、その中で私が興味を持ったのはドキュメンタリーでした。他の分野に比べて少人数で製作するため、撮影、編集等、一本の作品が完成するまでの一通りのことをまとめて学べるという利点があり、何でもやってみたいという私にとって魅力的でした。

ドキュメンタリーコースに入って最初の実習は、富山県のとある山村での撮影合宿でした。課題は、そこで出会った人に撮影交渉をして「その人の人生の一番ドラマチックなこと」をテーマにインタビュー中心の短編作品を作るというもの。全く見ず知らずの村を歩き回って出会ったのは既にご隠居されていた老夫婦で、撮影機材を抱えて歩く私たちを見かねて声をかけて下さったのがきっかけでした。

「人生で一番ドラマチックだったことは何ですか?」とさっそくご主人へのインタビュー撮影を始めたところ、「戦後、シベリアに連れて行かれて辛かったことかな」と話し始めました。ご主人はシベリア抑留の体験者で、日中戦争後の捕虜として3年をシベリアで過ごしたとのこと。思いもよらなかった切り口に驚きつつ、シベリア抑留についてのうろ覚えの知識を総動員しながらお話を伺い、ご主人も当時の辛かったエピソードをポツポツとお話してくれました。水田の風景が美しい山村にある、古いけれど立派な合掌造りの家の静かな居間で語られた、常に死と隣り合わせのシベリアでの体験談。淡々とお話されていたご主人でしたが、ソ連軍に雇われたモンゴル人の看守たちからひどい仕打ちを受けたことを話すうちに穏やかだった表情が徐々に曇り、ついには顔を歪ませながら「相撲を見てるとね…朝青龍が…朝青龍が憎い!」と吐き捨てるように言い放ちました。

撮影当時の横綱・朝青龍はモンゴル出身というだけで、そのモンゴル人看守たちとはもちろん何の関係もありません。ご主人もそんなことはわかっていて、それでも当時の記憶からモンゴル人への憎悪は今でも止めることはできない。過酷な体験をした人間のぬぐいきれ

ない記憶だけでなく、一人の人生には収まらない大きな歴史も内包されていたその強烈な一言と苦悶の表情を撮影したその瞬間、戦慄し興奮すると同時に、ああこれがドキュメンタリーか、とスッと腑に落ちました。その一言は私たちが撮りたかった「その人の人生の一番ドラマチックなこと」でしたが、撮られる側のご主人にとってもいつか誰かに語りたかったことだったのでしょう。撮る側と撮られる側が合致した瞬間でした。もちろんこれまで誰かにお話しされたこともあるかもしれませんが、たまたま「自分の人生のことを聞きたい」と来た学生たちに話しているうちについ吐き出した言葉によって、そこに居た全員が場を共有したような感覚を覚えました。「ドキュメンタリー」が生まれる瞬間を初めて体験したこの時のことは今でも忘れることはできません。

ドキュメンタリーのほとんどは偶然の出会いから生まれます。その出会いをきっかけに、映画作りを口実にさまざまな世界を知ることができる、繋がることができるというのは本当に刺激的で、中毒性があるとも言えるその魅力が、10年続けてしまった一つの要因なのかもしれません。

形にすること／届けるということ

ドキュメンタリーの魅力に憑りつかれてしまったのか、本来なら卒業したら映像関連会社に就職するはずだったのですが、そのままフリーランスで映画の製作・配給をするようになってしまいました。きっかけは卒業制作作品として製作した『アヒルの子』（監督：小野さやか／２０１０年公開）という作品です。両親と3人の姉兄がいる家族関係の悪化で「生きること自体が辛い」と煩悶する監督自身が「家族を壊す」ことを決意し、それぞれと対峙するというストーリー。担当講師だった原一男監督（『ゆきゆきて、神軍』等）バリにタブーなしで家族へ対峙していく強迫的な衝動によって、観る者を突き動かすようなドキュメンタリー映画で、学校の卒業制作作品ではありましたが、「家族とは何なのか」という広く訴求できるテーマだったこともあり、制作当初から劇場公開を想定しながら完成させた作品です。

卒業後、『アヒルの子』の劇場公開を目指して上映の

準備に取りかかりましたが、ここで落とし穴が待っていました。登場した監督の家族が映画の公開に反対したのです。監督自身が精神的に追いつめられていたとはいえ、プライバシーもあえて度外視するような無茶な撮影を敢行して完成させた作品でした。撮影自体は末娘を案じるご家族の厚意で受け入れてもらえたのですが、撮影された内容自体プライベートな内容が濃厚で、ご家族にとっては「他人様に観せるなどとんでもない」代物ということで劇場公開を拒絶されてしまいました。自身のために映画を作り公開しようとしていた監督もこの家族の反応を受けて、映画を作ることで家族を傷つけてしまったという重荷を背負い、また負の感情のスパイラルに陥いることになりました。

ドキュメンタリーは、そこで生きている人々の姿や思い、人生を撮影させて頂くことで制作し、完成した作品を観客に観てもらうことで初めて成り立ちます。劇場公開というのは一般に広く観てもらうための、社会と繋がっていく活動ですが、ドキュメンタリーという表現には常に孕んでいる加害性、他人の人生に触れさせてもらうことだけでなく、さらにそれを不特定多数に晒すことに対する自覚と責任ついての認識の甘さを痛感した出来事でした。

結果的には、ご家族の納得と本人の覚悟が定まるまで5年がかかりました。その間、私は別の作品を製作し、初めて自力で劇場公開をするところまで作品を持っていくことができました。その経験もあって『アヒルの子』についても作ったからには、広く観てもらう価値がある作品なら劇場公開をして広く届けたいという意志を何とか待ち続けることができました。『アヒルの子』は2010年に無事劇場公開を果します。一人の人間が家族について思い悩んでいるところからスタートしたこの作品は、ようやく公開できたことで同じように家族との関係について悩んでいるような方々だけでなく、たくさんの人に届いていきました。

作り手がこういう作品を作りたいから、作ったから、ということだけでは成立しない難しさがドキュメンタリーにはあります。しかし、作った作品は子どものようなもので、制作者としては、作品が産み出されたのであ

ればできるだけ多くの人の元へ巣立って行って欲しいと願っています。『アヒルの子』という1本の映画を通して、ドキュメンタリーを作ることの難しさと喜びを体感したことはその後の制作活動の根幹になりました。

残し続けること／作り続けるということ

そんな感じで1本1本製作しているうちにあっという間に10年が経ち、その間にたくさんのドキュメンタリーが産まれて巣立っていきました。映画として完成したらなるべく劇場で公開し、たくさんの人に観てもらうように努力しますが、一定期間の上映が終われば多くの作品は観てもらう機会が少なくなります。

しかし、作品は上映素材を破棄したり、全て紛失しない限り存在し続け、映画に登場した人物たちの人生はそのまま続いていたとしても、撮影当時のまま、完成した状態のままで留まり続けます。記録映像という性質上当たり前のことなのですが、完成して上映がひと段落したからハイ終わりとはいかないことが、10年続けてきてようやくわかってきました。

『隣る人』（監督：刀川和也／２０１２年公開）という児童養護施設を取材した作品では、撮影当時小学生だった子どもたちが、２０１６年現在は高校生になっています。また『ただいま　それぞれの居場所』（監督：大宮浩一／２０１０年公開）では介護施設を取材しましたが、出演して頂いた施設利用者のご老人たちの多くは他界されました。映画を観ると、いつでも撮影当時の姿を観ることができますが、登場した人物たちの人生はそこで留まらず、成長していく人がいれば亡くなる人もいます。ドキュメンタリーを作り、作品という形で残すことは登場した人物たちの人生の一部を背負わざるを得ません。作品の数だけ、関わった人の数だけ、その重みをひしひしと感じています。作品を残し続けることは、ドキュメンタリーに携わった者の重要な役割の一つです。

他人の人生を背負うなんてそんなしんどい思いをしながらなぜドキュメンタリーを作り続けるのか、こんな感じで自問するようになりましたが、もしかしたら、生物が子孫を作って遺伝子を受け継いでいくような、バトン

のようなものなのかもしれません。ドキュメンタリーを作ることで制作者が他者と繋がり、上映し残していくことでまた違う他者と繋がっていくような。「映画は生きものの仕事である」とは日本ドキュメンタリーの巨匠、故・土本典昭監督の言葉。生きものの仕事、なるほどそういうことなのかもしれないなと、最近少しだけ体に染み込んできた感じがしますが、たかだか10年、しっくり来るにはまだ時間がかかりそうです。

大澤一生（おおさわ・かずお）映画プロデューサー

１９７５年生まれ。日本映画学校（現・日本映画大学）でドキュメンタリーの制作を学び、卒業後は数々のインディペンデント・ドキュメンタリー映画の製作に携わる。主なプロデュース作品に『バックドロップ・クルディスタン』（２００７年・野本大監督）、『アヒルの子』（２０１０年・小野さやか監督）、『隣る人』（２０１２年・刀川和也監督）、『ドキュメンタリー映画　１００万回生きたねこ』（２０１２年・小谷忠典監督）、『フリーダ・カーロの遺品 石内都、織るように』（２０１５年・小谷忠典監督）など。他、制作参加作品多数。